

「杉本博司さん」と言っても、まだ知らない人もいしょうし、私も 5,6 年前までは全く知りませんでした。しかし知る人ぞ知るで、本業の写真家としては写真展に最高動員数を記録したり、古典芸能の公演企画や、斬新な芸術作品、建造物もあり特に若い人には人気があるアーティストです。御年 70 歳。

私は杉本氏が小田原市江之浦の相模湾を眼下に望む絶景の地に、美術館を計画された頃から注目していました。3000 坪の広大な敷地にギャラリー、茶室、石舞台、光学硝子舞台、円形劇場観客席など様々な芸術建造物や杉本氏独自の選眼による古代からのアート品が点在し、今では他に類を見ない卓越した所となりました。最も特徴のあるのは冬至の朝、相模湾から昇る太陽光を 70 メートルの長さの隧道に捉え、対面した巨石に映し出すと言う設えなど、随所に春夏秋冬の陽光が考察されていることです。ここが敢えて美術館という名でなく「江之浦測候所」と命名されている由縁とと思います。(JR 根府川駅からシャトルバスで約 10 分。電話 0465-42-9170 見学は予約制で 3 時間。見学科 3000 円)

開館して 1 年。ここで私としては待望の能公演があると言うので、10 月 18 日に行って来ました。石舞台の上に木の板を敷いての舞台ですが、4 方に竹笹が立てられているだけで、間近に自然の山並と眼下の海を眺めながらの野外能。当日は晴天で申し分のない日和でした。

小田原・江之浦は、豊臣秀吉が北条攻めで長陣に及んだ時、利休を呼び寄せ、茶室「天正庵」作った所で、その跡はこの美術館のすぐ近くにあります。特にその時、利休が使ったと言われる竹の花入れ「おだわら」は、この辺りの葦山から切り出された名品とのこと。このようなご縁、来歴に杉本氏は創作意欲を掻き立てられて、新作能「利休一江之浦」を立案されたそうです。

彼の構想をもとに、馬場あき子さんが物語に展開し、浅見真州さんが能本作成と演出、囃子作調は亀井広忠さん、舞台監修を片山九郎右衛門さん・杉本博司さん。新作能はこうして出来あがりしました。

この能の上演は今回で 3 回目。昨年は MOA 美術館能楽堂とニューヨークでもあり、実は私は MOA 能楽堂の初演も観に行きました。その時は能の中でお茶を立てる場面も含め全体で 2 時間近く、ちょっと長すぎる感じを持ちました。でも今回は能の前に千宗屋さんが舞台の上でお茶のお手前を披露され雰囲気盛り上げ、能は 1 時間 10 分程と丁度良い長さとなり、最初から最後までしっかり舞台を見入る事の出来る素晴らしい完成度でした。

『利休一江之浦』 老人・観世鍔之丞 利休ノ霊・片山九郎右衛門 細川忠興・梅若紀彰 忠興ノ従者・谷本健吾 観世淳夫 笛・竹市学 小鼓・成田奏 大鼓・亀井広忠 太鼓・大川典良 地頭・味方玄 他。

まずこの能は一般的なワキの役を利休の弟子である細川忠興に置き換えて、梅若紀彰氏が演じます。直面なので危なげないのですが、シテの老人(鍔之丞)は面を付けて、石段を昇り、わずか板 3 枚の細い橋掛りを進んでくると、見ている方も緊張感で一杯。老人は千利休のなり変わりで、かつて秀吉に重用されたことや、天下一の宗匠であったにも関わらず、時過ぎて秀吉に死を命ぜられたことなどをワキ・シテの問答や地謡で物語ります。新作能の特徴は候という詞を使わないのですが、違和感はありません。

この前場で老人が退場する風情が、この能では圧巻だったと私は思いました。シテは観客に背を向け橋掛りの手前で立ち止まって両手を広げると、袖が風を纏って膨らみ、その向こうには山並。折りから磯ひよどりが音を添えて、しびれる程素晴らしかった。芸能と自然の融合とでもいうのでしょうか。

今回は前シテと後シテが別の演者でしたから、流れがスムーズで後場になり、利休の霊(九郎右衛門)が登場。茶道における秀吉と利休の考えの違いか或いは今なお謎と言われる理由によって、利休は 70 歳で切腹をした話が展開されます。そして刀を持った力強い舞が舞われ能は終わりました。

古典の能で鍛えられた演者達でしたから、新作能の新しい挑戦も成功裡に終わった気がしますが、改めて古典能の特徴、例えば余り説明をしないで簡素化して表現することの凄さも思い起こしました。

当日の観客は約 150 人。とても贅沢な観能でした。

尾崎 純子・記